

BOOK Review

地域医療構想のデータを どう活用するか

評者 望月 泉 八幡平市病院事業管理者

急速な少子高齢化の進展に伴い、医療介護需要の増大と疾病構造の変化が予測される2025年に向けて、構想区域ごとに協議の場（地域医療構想調整会議）で話し合い、将来の必要病床数や在宅医療等の需要を推計し、将来のあるべき医療提供体制の構築に取り組んでいく必要がある。同時に効率的かつ質の高い医療提供体制の確保の必要性が求められ、高齢化を見据えた、将来のめざすべき医療提供体制を実現していく上で、限られた医療資源の基では、病院・病床ごとに機能を分け、連携することが効率的であると考えられてきた。著者の松田晋哉氏は産業医科大学医学部公衆衛生学教室教授で社会医学者である。日本における医療制度改革分野でのオピニオンリーダーであり、地域医療構想における構想区域ごとに示される機能別病床数の推計値の基礎的研究も担当されてきた。

本書は6章で構成されている。第I章は「地域医療構想の考え方」で、地域医療構想導入の経緯・意義、病床機能別病床数推計の考え方と続き、今までほんやりとしていた地域医療構想についてあらためて頭が整理される。第II章は「厚生労働省の諸施策と地域医療構想」で働き方改革、専門医制度と地域医療構想のかかわりについてわかりやすく述べている。第III章は「地域医療構想におけるデータ分析の考え方」で本書の本丸となる。地域医療構想に関連して作成されている公開情報や公開ツールを用いて、自施設のある地域の状況について本書の記述に従って分析することが可能になると同時に、需要構造を

把握し、自施設の計画を立てることができるようになる。一般臨床医にとってあまりなじみのない表やグラフが多数載っており一見とっつきにくい印象を与えるが、読み進めていくとデータ分析の面白さが実感され、すぐに応用できるようになる。私も地域医療構想アドバイザーとして地域医療構想調整会議に出席しているが、膨大な資料の報告に終始し、各医療機関が地域における自院内の病床機能をデータに基づいて客観的に把握し、自院の将来像を描くような議論にはなっていない。他院の病床機能に対し、何か意見を言うことははばかられ、活発な議論はできていないように思われる。ぜひともデータ分析に取り組む習慣を身に付けたい。その後の章では機能選択・病床転換の事例紹介があり、極めて興味深く、自院の将来計画を描く際の参考になる。

本書の「あとがき」で新型コロナウイルス感染症と地域医療計画との関係について述べられている。今までの5疾病5事業には新興再興感染症は含まれておらず、今回の流行時に混乱を来した。人の移動のグローバル化により、今後もわが国は新しい感染症の流行に直面する可能性がある。安全保障の観点からも議論が深まることを期待したい。

本書は病院長・病院管理者だけでなく、日頃患者さんの診療に忙しい臨床医にもぜひ読んでいただきたい。本書を傍らに置き、データ分析の手法から自院の将来構想を検討することもまた楽しみである。

地域医療構想の データを どう活用するか

松田 晋哉

2025年まで、あとわずか。
地域ごとの実態に即した
医療提供体制の構築に向けた、
地区診断と施設計画のために。

医学書院

松田 晋哉 著

B5判/144頁/2020年/定価(本体3,500円+税)/ISBN978-4-260-04252-9/医学書院刊